

革新主義期のアメリカ・ユダヤ人女性団体による
ユダヤ教(Judaism)解釈の諸相
—NCJW と Hadassah を事例に—

石黒 安里

同志社大学研究開発推進機構特別任用助教

要旨

20世紀転換期における米国は、フロンティアの消滅を迎え、急速な工業化と都市化を果たした。また大量移民の流入により国内社会が大きな変容を迫られた時代であり、同時に、対外的には帝国主義により国外進出が盛んになっていた時代でもある。この社会変革期に、主にミドルクラス以上の白人女性たちにより女性団体が設立されはじめ、それまでの私的な領域から公共領域への活動圏の拡大が図られた。一方、米国在住のユダヤ人女性たちもその例外ではなく、この時期に従来のユダヤ教の文脈の中での活動領域を超え、公的な女性団体を設立している。

本稿では、全米ユダヤ人女性会議(National Council of Jewish Women, NCJW)とアメリカ・女性シオニスト団体であるハダッサ(Hadassah)という二つの女性団体を取り上げ、それぞれのユダヤ教(Judaism)の伝統についての解釈に焦点を当てる。そして、その作業を通じて、彼女たちの曖昧且つ変容する複雑な解釈から、同時代のアメリカにおけるユダヤ教改革運動の実態の一端を浮き彫りにすることを目的としている。

キーワード

アメリカ・ユダヤ人女性、ハナ・グリーンバウム・ソロモン、全米ユダヤ人女性会議(National Council of Jewish Women, NCJW)、ハダッサ、ユダヤ教改革運動

American Jewish Women's Organizations' Interpretation of Judaism in the Era of Progressivism: The Case of the National Council of Jewish Women and Hadassah

Anri Ishiguro

Assistant Professor

Organization for Research Initiatives and Development, Doshisha University

Abstract:

In the transition to the 20th century, the United States—as its frontier disappeared—began to rapidly industrialize and urbanize. Further, the simultaneous massive influx of immigrants brought major transformations to domestic society while imperialism flourished outside the country.

During this period of social transformation, women's organizations sprung up, established mainly by middle-class white women, and their activities gradually expanded from the private to the public sphere. Jewish women were no exception to this trend, and they established public women's organizations that became involved in activities beyond the context of traditional Judaism. In this paper, I focus on two Jewish women's organizations—the National Council of Jewish Women (NCJW) and Hadassah, the Women's Zionist Organization of America—to interpret early-century Judaism. I examine the reality of the Jewish reform movement in the United States at that time, the ambiguous and complex interpretations of Judaism, and the organizations' attempts to reinterpret traditional Judaism.

Keywords:

American Jewish Women, Hannah Greenbaum Solomon, National Council of Jewish Women (NCJW), Hadassah, Jewish Reform Movement

1. はじめに

アメリカにおける革新主義時代（1890年代から1920年代に至る時代）とはいかなる時代であったのだろうか。革新主義には相反する取り組みが内包されており、一言でそれを定義することは困難である。革新主義を一義的に語ろうとする試みは、かえって革新主義の持つ多面的な本質を見逃すことになるだろう。しかし、あえて革新主義時代の特徴を挙げるとすれば、そこには二つの特徴が見受けられる。一つは、19世紀末の米国は急速に工業化と都市化を果たし、フロンティアの消失に直面していたという点である。さらに大量の移民が流入したことにより、既存の経済システムの変容を迫られた時代であった。もう一つは、国内のフロンティアを失った米国は国外へと目を向け始め、海外への進出が盛んになり始める時代であった点である¹。よく知られている帝国主義の展開である。このような社会変革の只中で、女性に焦点を当てるとすれば、革新主義の時代は、主にミドルクラス以上の白人女性が公共圏で活躍をし始める時期と重なっている。ユダヤ人女性についても例外ではなかった。この時代にユダヤ人女性団体と冠する組織が設立されている。

本稿では、そのユダヤ人女性団体の先駆けであり、1893年にハナ・グリーンバウム・ソロモン(Hannah Greenbaum Solomon, 1858-1942)によって設立された、全米ユダヤ人女性会議(National Council of Jewish Women, 以下NCJW)と1912年にヘンリエッタ・ソルド(Henrietta Szold, 1860-1945)らによって設立された、アメリカ・女性シオニスト団体であるハダッサ(Hadassah)という二つの女性団体に着目する。これら二つの団体が、ユダヤ教(Judaism)の伝統についていかに解釈を行ったかを検討したい²。そして、本作業を通して、同時代のアメリカにおけるユダヤ教改革運動の実像の一側面を明らかにすることを目的としている。

また、日本国内における20世紀転換期のユダヤ人女性に関する研究は、主に社会史、移民史、アメリカ史の中のエスニシティ研究、ジェンダー研究の領域のなかで論じられてきたが、ユダヤ学の視点から同一テーマを論じたものはこれまでほとんどなされていない³。本稿は、日本国内の先行研究の蓄積に対し、ユダヤ学の視点を加えることで、これまでそれぞれ個別のディシプリン上に蓄積されてきた20世紀転換期から革新主義期に至るユダヤ人女性に関する研究とアメリカにおける改革派ユダヤ教の展開の歴史の一端を結びつける試みでもある。

2. ユダヤ人女性団体設立の背景

2-1. 社会的背景

まず本章では、ユダヤ人女性団体設立の背景を、米国の時代状況とアメリカ化

の過程の中で確認する。

2-1-1. 女性団体設立の揺籃期

冒頭で述べたように、20世紀転換期の米国は、主にミドルクラス以上の女性に限られたことではあるが、白人女性たちが家庭から徐々に公的領域に活動圏を拡大していく時代と重なっている。ユダヤ人女性もまた例外ではなく、すでに1840年代に米国に移住し、中流階級化を果たしていた、主にドイツ系のユダヤ人女性を中心に女性団体が設立されていく。1880年代以降に米国に移民した東欧系はドイツ系と比較するとまだ経済状況も芳しくなく、世紀転換期から1910年代にかけて、東欧系女性はまだ工場労働者として働く者が主流であった⁴。そのため初期のユダヤ人女性団体の設立者および指導者はドイツ系に偏っていたことは否定できない⁵。

しかしながら、ドイツ系のユダヤ人女性に限定されていたとはいえ、米国における女性団体設立の揺籃期の波にユダヤ人女性も例外なく乗っていたことが確認できる⁶。

2-1-2. ユダヤ人の視点から見るアメリカ化の過程—三つの位相—

革新主義時代は様々な分野で社会改革がもたらされたと同時に「アメリカ化」⁷が促進された時代でもあった。別の言い方をすると、「アメリカ化」は、ユダヤ系に限らず、あらゆる出身地の移民が、アメリカ社会への同化と個人の有している故郷（出身地）の文化的・習慣的伝統といかに折り合いをつけるか、ということが問題とされた時代であるとも解釈することができる。この革新主義時代のアメリカ化とユダヤ人との関係を考える場合、以下の三つの時代的特徴を通して考えることができる。

一つ目の特徴は、アメリカ社会一般における革新主義的な改革では、「旧式」とされた家事労働を当時の最新式器具や知識を導入することにより、「科学的」に家事労働を改革することが善とされた時代であった点が挙げられる。故郷から持ち寄った「旧式」を捨て、アメリカの最新の知恵に準ずること、すなわち「アメリカ化」することが期待されていた。

二つ目は、松本悠子が論文「移民の母と娘—『アメリカ化』をめぐって—」（1989年）の中で指摘するように、「アメリカ化」は、アメリカ社会全般のなかで繰り広げられるものに加え、ユダヤ系内部でも促進された時代であった点である⁸。具体的には、ドイツ系ユダヤ人による東欧系ユダヤ人に対して行った福祉教育活動の取り組みが挙げられる。1880年代から1920年代初頭に至るおよそ40年間のあいだに200万人規模で大挙して米国にやってきた東欧系ユダヤ人らは、移住して間

もないこともあり、貧しい生活環境に置かれていた⁹。先にアメリカ大陸に定住し、すでにある程度の「アメリカ化」を果たしていたドイツ系ユダヤ人たちが積極的に東欧系ユダヤ人に対して福祉教育活動を行うことによって、東欧系ユダヤ人の「アメリカ化」を成し遂げることに協力したことが指摘できる¹⁰。

三点目は、改革派ユダヤ教の「アメリカ化」である。つまり、18世紀の終わりにドイツで生じた改革運動がアメリカ大陸へと上陸し、土着化していく過程のなかで、ユダヤ人女性団体設立をいかに位置づけるかという問題である。改革派ユダヤ教の「アメリカ化」とは、換言すると、よりアメリカ社会に溶け込む形で、ユダヤ教を変化させる過程である。しかし、結論を先取りするならば、この革新主義期（20世紀転換期）には、まだ改革派ユダヤ教内部で、女性が指導者として大々的に活躍できる時代ではなかったため、とりわけ中流階級のユダヤ人女性たちは、積極的に女性団体設立へと活動の場を見出していくことになった。次節では、NCJW とハダッサの設立理由を瞥見する。

2-2. 全米ユダヤ人女性会議(National Council of Jewish Women, NCJW)の場合

全米で初めてユダヤ人女性による団体が設立されたのは1893年のことである¹¹。シカゴで開催されたコロンビア万国博覧会の最中に開かれた第一回ユダヤ女性会議(The Congress of Jewish Women)の最終日に、ハナ・グリーンバウム・ソロモンによって結成されたのが、ユダヤ人女性団体として知られる、全米ユダヤ人女性会議(NCJW)である。先に述べたように、NCJW もまたすでに米国で一定の経済的、社会的地位を築いていた女性らによる団体であった¹²。NCJW が設立される契機にもなったこのコロンビア万博では、万国宗教会議(The World's Parliament of Religions)が開催され、そのもとで、女性委員会(The Women's Board)が設置された。

同委員会の設置は、女性が条件付きとはいえ、一定の社会的地位を得たことを示すものであり、女性による団体の活動が可能となる土壌がすでに米国に整っていたことがわかる。NCJW もこの時代の機運の中で設立されたことになる。NCJW の主な目的は二つに集約することができる。一つは、ユダヤ的教育を充実させること、もう一つは、移民してきた人々が米国社会へ馴染むように手助けするプログラムを充実させることである¹³。もちろん、NCJW の中にいた女性たちの動機は一枚岩ではなかった。NCJW の中にも、ソロモンのようにシオニズムに共鳴を示す者が存在していた¹⁴。しかし、次に焦点を当てる女性団体、ハダッサと比較すると、NCJW はシオニスト団体ではないことが明らかであった¹⁵。ただし、ハダッサの創設者且つ指導者であったヘンリエッタ・ソルドが NCJW の指導者をたびたびパレスチナへ招聘していたことから、NCJW とハダッサの女性たちがシオニスト／非シオニストの区別なく、交流していたことが明らかとなっている。ユ

ダヤ系女性団体である NCJW とハダッサの関係性を考察する場合、それらがシオニスト団体であるか否かという違いを強調するのではなく、むしろ本稿第三章で見るように、両団体とも Judaism を組織の要としていることが重要な点であると指摘しておきたい¹⁶。

2-3. ハダッサの場合

ハダッサ（正式名称、The Hadassah and The Women's Zionist Organization of America）は、1912年、ニューヨークの改革派のシナゴグ、テンプル・エマニュエルで結成された女性によるシオニスト団体である¹⁷。ハダッサの活動の特徴も主に二点挙げることが可能である。まず、活動拠点は、イスラエル建国以前のパレスチナとアメリカ本土の二つの領域において展開された。その主な活動内容の一つ目は、イスラエル建国以前のパレスチナの地で、公共衛生環境の向上やアメリカの最新医療の技術・人材を派遣することに努めたことが挙げられる。また建国後も、子供たちの教育部門の一部を支援する活動に従事している。二つ目は、米国本土で、次世代のユダヤの子供たちに、ユダヤ・アイデンティティを継承するための課題に取り組んでいることである。もっとも、ハダッサもその設立当初は、米国へ移民としてやってきたユダヤの同胞（東欧系）が米国社会へ速やかに馴染むよう、英語や洋裁などを教えるクラスを開講していたことから、前述した NCJW の活動目的の一つと合致する側面を有している。

ハダッサをシオニスト団体としてみた場合、米国ではシオニストは少数派であったとはいえ、すでにハダッサが設立された 1912 年には全米シオニスト機構 (The Zionist Organization of America, ZOA) が存在していた。あえて、彼女たちがハダッサという女性によるシオニスト団体を設立させた社会的背景およびその要因の一つとして、彼女たちが子供を救うという点に焦点を当てたことが関係している。ハダッサの専門家の一人、エリカ・B・シモンズ (Erica B. Simmons) は、このようなハダッサの特徴を「シオニスト的母性主義 (Zionist maternalism)」¹⁸ という語でもって言い表している。

シオニスト的母性主義の核心は、ユダヤ人の女性がイシューヴ [英国委任統治下のパレスチナにおけるユダヤ人共同体] で社会福祉のための **特定の責任** を負うという考えであった。この原則に基づいて、ハダッサはその後、社会—政治的イデオロギーを輸入しただけでなく、アメリカの革新主義的な母性主義 (American Progressive maternalism) が色濃く反映された一連のプロジェクトをパレスチナにもたらした¹⁹。(強調は引用者による)

シモンズが述べる「特定の責任」とは、ハダッサの初期の活動である、医療・社会福祉事業の分野をハダッサが担ったことを意味する。ハダッサに限らず、国際的なシオニズム運動を俯瞰してみると、世界シオニスト機構(The World Zionist Organization, WZO)が存在していたにもかかわらず、1920年にはイギリスで、国際女性シオニスト機構(The Women's International Zionist Organization, 以下、WIZO)²⁰が設立されている。WIZOの活動もハダッサのそれと類似しており、イスラエル建国以前のパレスチナで女性と子供たちを救済することを目的として設立されたものである²¹。

2-4. 「ユダヤ人」女性団体としての意義

では、NCJW やハダッサといったユダヤ人女性団体を設立した意義は何であったのだろうか。すでに革新主義時代として位置づけられる当時の米国は、女性団体設立の揺籃期であったことを指摘した。それは、ユダヤ人女性によるユダヤ人女性のための女性団体の設立が盛んであったというだけではなく、女性団体そのものの設立が顕著な時代であった。では、「ユダヤ」という固有名詞を取り除いた女性一般の団体ではなく、ユダヤ人であった彼女たちがユダヤ人女性団体としての活動に意義を見出した理由は何か。あるいは、彼女たちの公的な活動の場として、ユダヤや女性に特化した団体を設立するのではなく、一般の団体において社会福祉活動に取り組むだけでは不十分であったのだろうか。彼女らが「ユダヤ」を冠した女性団体を設立する理由は何であったのだろうか。

アメリカのユダヤ人女性史、とりわけ女性とユダヤ教との関係をめぐるテーマへの造詣が深いことで知られる、パメラ・S・ナデル(Pamela S. Nadell)はNCJW やハダッサのような女性団体を以下のように位置づける。

これらの団体〔NCJW やハダッサ〕は、ユダヤ人の活動とその関わりのために女性に公的な場を与えた。彼女らは、*Jewish Home Beautiful*²²だけでなく、深くアメリカのユダヤ人(American Jews)に傾倒した次世代を育てることに欠かせないツールを同胞の女性たちに提供することを目指して、同胞に教育を授けるという多大な資源を投資した。保守派のシナゴグに託されたシスターフッドの集まりである National Women's League²³から出版された *Jewish Home Beautiful* や似たような作品は、夫と家族に対する女性のユダヤ的活動〔Jewish activity〕の中心的な領域として、家庭を強調し、「あらゆる機関の中で〔家庭こそが〕最大のもの」、〔家庭が〕ミニチュアテンプルとして〔機能し、〕女性たちを家庭〔という意義深いユダヤ的活動の領域〕へと促した。

それにもかかわらず、これらの組織〔NCJW やハダッサ〕はまた、女性に社会活動と公的活動のための重要な新しい場所を提供した²⁴。(強調は引用者による)

つまり、ナデルが言及しているように、NCJW やハダッサは単に同胞の女性たちに、公的活動の場を提供しただけではなかったことがわかる。それと同時に、ユダヤ系女性団体が担った役割は、次世代にアメリカ・ユダヤ人としてのアイデンティティを根付かせるための教育を施すことが期待されていたのである。その教育を担う団体として、NCJW やハダッサといったユダヤ系女性団体が必要な存在として機能したことがうかがえる。またナデルは、保守派のシナゴグに付属する形で活動した女性団体が、その規範ともなる、*Jewish Home Beautiful* という冊子をはじめ、女性たちが次世代を育てるための場である家庭をあずかる者として重要な担い手であったこと、*Jewish Home Beautiful* が次世代を育てるための指南書として有効であり、それが果たした役割を認めている。しかし、これに対し、NCJW やハダッサは家庭における次世代への教育という重要な女性の役割を、家庭の領域のみならず、公的空間へと拡大し、より大きな規模で次世代の育成に取り組んだという点を指摘することができる²⁵。ユダヤの宗教教育の重要性は、アダ・タガー・コヘンが指摘するように、「捕囚以後はユダヤ人のアイデンティティを保持、強化する制度として発展してきた」²⁶と言えるだろう。一般的に、トラーの教育の義務は女性には課されてこなかったが、それでも、家庭内での次世代へのユダヤ的遺産ないし伝統の継承は女性を通しても行われてきた。

女性の家庭内でのユダヤ的教育、すなわちユダヤの伝統・文化を次世代へ伝える教育の重要性は、毎週訪れる安息日²⁷の始まりに燭台に火を灯す役割からもうかがえる²⁸。ハシア・R・ダイナー(Hasia R. Diner)は、ミンハグ (*minhag*: 慣習) や伝統は、生けるユダヤ共同体の中で、女性と男性の〔共同の〕義務の履行を通して〔培われてきたものであり、そのようにして〕、ユダヤ教(Judaism)に関する儀礼が発展してきたと評している²⁹。ダイナーは「安息日は家庭から始まる」と論じ、必ずしもユダヤ教の遵守がシナゴグの中だけで行われてきたわけではない点を強調している³⁰。ダイナーが指摘するように、ユダヤ・アイデンティティを保持するための教育は家庭において育まれてきたと言えるだろう³¹。この考え方は何も新しいものではなく、古くからユダヤ教の実践において実行されてきた。ただし、伝統的に日々の祈りの朗読や祈祷文などを子どもに伝えるのは父親の役割とされており、女子教育は、一部の祈祷、祝祷など家庭内に限った戒律の知識のみに留められてきた³²。

近代以降の「男女平等」という視点からすると、ユダヤ的教育の享受が女性に

は極めて限定的なものであったという批判も提出されることになるが、教育の担い手という観点からすると、父親だけでなく、母親もその重要な役割を担ってきたということは否定できない。

つまり、NCJW やハダッサといった女性たちが、積極的に「女性の領域」として家庭での教育に女性の役割の重要性を見出している点では、伝統的なユダヤ教の解釈のうちに留まっていることが明らかである。革新主義期のユダヤ系女性団体の活動を鑑みると、彼女たちは家庭内にとどまらず、公的領域にまで活動圏を拡大したものの、家庭こそが女性の領域であるという理念から脱却するまでには至っていなかった。(この理由に関する考察は、本稿第4章参照。)

ナデルの引用箇所で示したとおり、彼女たちがこだわったユダヤ系女性団体の意義は、ユダヤ・アイデンティティの保持という考え方が背景にあると考えられる。このことを考察するために、次章では、NCJW とハダッサのそれぞれの女性団体が、Judaism をどのように解釈したのかについて明らかにしていく。

3. 再解釈される「ユダヤ教」とその実践

3-1. NCJW の事例

3-1-1. ハナ・ソロモンの伝統的且つ肯定的な Judaism 理解

NCJW の創設者且つ初代代表を務めたソロモンは、NCJW が設立される以前から、女性による活動団体に関心を持っており、1877年、シカゴで「シカゴ・女性クラブ」(The Chicago Woman's Club)に参加している³³。ソロモンの宗教的な関心は以下の記述により確認できる。彼女は、上述の女性クラブに参加した際、通常、女性クラブでは、女性参政権を含む政治的事項について協議することが求められており、宗教的な議題はタブーとされていた。しかし1892年、同女性クラブのプログラム委員会の依頼で、ソロモンは“*Our Debt to Judaism*”という表題で宗教的事項について協議する機会を得ることができ、彼女の発題を聞いた聴衆も宗教的な議題に関心を示した様子が、ソロモンの自伝の中で報告されている³⁴。ソロモンの講演では、まず、キリスト教社会における女性クラブのルーツはユダヤ(Jewish roots)にあると主張した。彼女の望みは、女性の生活の営みの中心に、宗教的役割を据えることによってユダヤ教(Judaism)の肯定的な見方を広めようとするものであった³⁵。ソロモンは、ユダヤ教が家父長的な宗教でキリスト教より劣っているとする見方に対して、ユダヤ教が必ずしも家父長的な宗教一辺倒ではないことを提示し、クリスチャンによるユダヤ教の固定的な見方を相対化しようと試みた。実際、クリスチャンのフェミニストの多くは、「ユダヤ・キリスト教的伝統」の元となっている要素である「ユダヤ的ルーツ」(“Judeo roots”)そのものが家父長主義

的性格の根源であるとみなし、そのせいで、キリスト教にも家父長的な見解が根付いているとして、ユダヤ教に対して否定的な見解を有していた³⁶。フェイス・ロゴウ(Faith Rogow)によると、ソロモンは以下のことを期待していた。

ソロモンは、ユダヤ人の男女が評判の良い家庭内での協力を、〔その協力関係が、男性を対抗者として設定する以上に、女性の権利を高めるうえで効果的であった〕女性運動に輝かしい例〔をもちたすもの〕として公共の場にもたたらすことができると信じていた³⁷。

つまり、ソロモンにとっては、男性の存在は、女性を脅かす敵対者ではなく、パートナーであった。また、この彼女の見解と NCJW での活動は、同時代のクリスチャン・フェミニストらによる、ユダヤ教を家父長主義そのものだとする固定的且つ批判的な見方に対して、ユダヤ人女性の立場から是正しようという試みとして解釈できるかもしれない³⁸。ソロモンは改革派の流れを汲む家庭で育ち、とりわけ彼女の父親は急進的な改革の立場を主張していた³⁹。それにもかかわらず、これまで見てきたソロモンの Judaism 理解は、ユダヤ教の文脈からすると伝統的な見方であり、そこに革新的な解釈を見出すことはできない。ソロモンの取り組みは、クリスチャン・フェミニストらを意識したユダヤ教側からの発言であり、「非家父長的な」ユダヤ教の姿を提示することにあつた。つまり、女性を男性のパートナー（対）として必要な存在であることを強調することで、ユダヤ教において女性の尊厳がある程度保たれてきたことを提示しようとしたのである。けれども、結果的には、クリスチャン・フェミニストに説得力のある形で、新しいユダヤ教像を提示することはできなかつたと言える。では、NCJW は Judaism をどのように解釈していたのか。その Judaism 理解はユダヤ教の文脈においてどのように位置づけられるのだろうか。

3-1-2. NCJW が解釈した Judaism

ソロモンは、“Jewish”であること、それ自体に、宗教的な意味合いを含んでいると認識していた⁴⁰。そもそも Judaism に関する関心は、ソロモンのみならず、同時代のユダヤ人女性団体を設立した指導層にも同様に関心のあるトピックであった。例えば、ソロモンは委員として参加していた、コロンビア万国博覧会の開催期間中に開かれた、万国宗教会議(The World’s Parliament of Religions)の第一回ユダヤ女性会議(The First Congress of Jewish Women)のプログラムに二名のユダヤ人女性に演説を依頼することを決定したが、その二名の女性が行った演説の題目からも Judaism に対する関心が伺える⁴¹。招聘されたスピーカーの内、一人は、ハダッ

サの設立者の一人でもある、ヘンリエッタ・ソルドである。彼女は“*What Judaism Has Done for Women*”と題したスピーチを披露した。もう一人の女性は、ジョセフィン・ラザルス(*Josephine Lazarus*)で、“*The Outlook for Judaism*”という題目のスピーチを行っている⁴²。

NCJW の指導層は、改革派の流れを汲む者で占められていたが、特定のユダヤ教の立場〔宗派〕を表明せず、中立な立場を保っていた⁴³。また非ユダヤ系の女性との連帯も行っていた点では、ハダッサとは異なる⁴⁴。

ただし、特定のユダヤ教の立場に依拠しなくとも、彼女たちは、アメリカ社会へ同化したのちも、*Judaism* が残っていくこと、あるいは、*Judaism* の重要性を主張していた。以下に取り上げるのは、ポーリン・ハナウアー・ローゼンベルグ(*Pauline Hanauer Rosenberg*)による端的な纏めである。

アメリカの土地にあって、どれほど人々の圧制によって無知であったとしても、彼らの直系の子孫は、改善とアメリカニズムの顕著な兆しを見せ、抑圧者の軛から解き放たれ、継承された適応力を備えている。この驚くべき第三世代の人々は、ユダヤ教(*Judaism*)の徴候として、自分たちの宗教だけを残すでしょう⁴⁵。

では、NCJW の *Judaism* 理解はどのようなものであったのだろうか。それは、ソロモンの姉妹の一人、ヘンリエッテ・G・フランク(*Henrietta G. Frank*)⁴⁶の主張に端的に表れている。それは、彼女がコロンビア万国博覧会の初日、1893年9月4日の午前の部でディスカッサントとして参加した際の、ヘレン・カーン・ヴェイル(*Helen Kahn Weil*)が報告した“*Jewish Women of Modern Days*”への応答である。フランクは、そこで以下のように語っている。

ユダヤ教は進歩〔*progress*〕を意味し、アメリカは機会を意味します。ユダヤ教は、その時代の最善の考えに適応する力を持っています。今日、世界では、より高次の文明へと世界を前進させることは、女性にとっては助けとなるでしょう。もしユダヤ教が真実なるものであるとすれば、ユダヤの女性たちは自分たちを束縛する足かせを破り、再び人生における大きな懸念事項に関心を向けなければならないでしょう⁴⁷。

フランクの理解によれば、*Judaism* は進歩、前進を意味し、女性はその担い手になり得ることを、女性たちに呼びかけている。続く引用では、女性クラブの存在が、彼女たちを家庭の外の責務にかかわるよう喚起していることがわかる。

家事担当者であり、幸福の贈り主としての女性は、これまでと同様に、主婦〔housewifery〕という素晴らしい技術の所有者として必要とされています。彼女は自ら成長しようと学ぶので、クラブでの活動はこれらすべての方向で役立つことでしょう。クラブ内で受講した教育は、彼女の外にある任務に適合させるでしょう⁴⁸。(強調は引用者による)

「外にある任務」すなわち、家庭外の責務とはこの場合、NCJW がその組織を通して行った同胞の移民をアメリカ社会へ適合させるように教育を施すといった活動を意味している。ソロモンやフランクたちは、女性の家庭での役割を否定することなく、同時に、女性たちが公的領域に出て、活躍することを期待していたのである。

3-2. ハダッサの事例

3-2-1. Judaism を公的に実践する場としてのハダッサ

NCJW に携わった女性たちは、Judaism を実践する場をシナゴークや家庭だけに限られるものではないと主張し、女性たちが家庭で担ってきた信仰の実践を公的領域においても行うように働きかけた。この動きはハダッサにおいても確認できる。

以下の内容は、ハダッサが東欧系のユダヤ人女性をハダッサの組織に勧誘するために発言したものである。

〔アメリカのユダヤ人の女性たち〕は母親や祖母が慈善箱(Pushkes)という途方もないやり方で行ってきたことを体系的にやり遂げる機会を熱心に受け入れるだろう⁴⁹。(強調は引用者による)

慈善箱(Pushkes)というのは、ユダヤ共同体のために使用される寄付金を入れる箱のことであり、シナゴークや家庭に設置されていた。特に東欧系の家庭では、安息日の蠟燭点灯の際に、この慈善箱に喜捨する習慣があった。そこで、ハダッサの指導者たちは、これまで行ってきたユダヤの慣習を家庭内だけに留めておくのではなく、公的領域においても取り組んでいくことが、信仰をより大きな規模で実践する機会になると、東欧系の女性たちに訴えた。伝統的な慣習を守る東欧系の女性をハダッサの活動に取り込むために、ハダッサは Judaism の慣習、この場合、慈善箱の役割の意義を再定義することで、家庭内だけでなく、公的領域に拡大して、Judaism を実践できるとし、会員の増加をはかった。

3-2-2. ソルドによるハイブリッドな解釈

ハダッサの設立者の一人であり、初期のハダッサにおける絶大な精神的指導者でもあったソルドは、ユダヤ教の慣習を守らず、ユダヤの教えを全く省みない世俗的な人物ではなかった。彼女は、当時の米国の文脈では、正統派の概念にも改革派の立場にも完全に当てはまることはなかったものの、Judaism を重んじる宗教的な人物であった⁵⁰。彼女の Judaism 理解は当時の正統派ユダヤ教の見解からすると、かなり革新的なものであった。例えば、ソルドは、エルサレム滞在中にシナゴグに行った際に、女性が男性らと同じ席で祈ることができないことに不満を持ち、西欧式〔この場合、改革派のやり方〕に基づいて礼拝様式を変えるように促したエピソードがある⁵¹。前項で取り上げたハダッサの慈善箱にみる Judaism の再解釈の例のように、ソルドは、伝統的なユダヤ教を現代の文脈に適合することを厭わなかったことがわかる。

また、ユダヤ人女性が公的領域で活躍することを喚起したソルドの演説では、ジェーン・アダムス(Jane Addams, 1860-1935)を例に取り上げ、ユダヤ人女性の社会福祉事業の問題解決能力の適性について、以下のように呼びかけている。

〔ジェーン・アダムス〕はシカゴの外国人の女性たちの中で、ユダヤ人女性ほど、現代生活の特徴である市民的、社会的な精神を吸収した適性を示した者はいないと考えています。〔…このことは〕ソーシャル・セツルメント事業者の判断において、児童労働、工場やスウェット・ショップでの虐待、テネメントハウスの改革、慈善事業の拡充、地方自治体の汚職、社会的再生といった問題を解決する上で可能な限りの貢献を約束するでしょう⁵²。

ここにソルドによる、Judaism の実践とアメリカの革新主義時代の社会福祉事業を織り交ぜた独自の解釈が誕生し、ハダッサという団体が設立された。

ハダッサが 1920 年代を通して、アメリカ・シオニズムの中で行ったシオニズム活動とは、シモンズが指摘するように、ハダッサのイスラエル建国以前のパレスチナにおける支援である。つまり、アメリカの革新主義時代に開花した社会福祉事業の一端——セツルメントや社会福祉の概念——をアメリカ・シオニズムに導入したものであった⁵³。

このように、NCJW やハダッサは、Judaism における女性の役割という点に関しては、伝統的な見解を保ちつつ、Judaism の実践という観点では、家庭から公的領域へと新しい活動の場を開拓していった。

3-3. シスターフッド(sisterhood)としての活動の一環

NCJW やハダッサのようなユダヤ系女性団体は、アメリカの女性史の文脈に位置づけるとするならば、20 世紀転換期に白人女性たちが公的領域に活動を展開し始めていた時期と重なる。しかし、彼女たちが女性団体を設立した動機は、単に男女平等だけを求めた結果ではなかった。むしろ、彼女たちが望んだのは、シナゴグ内での女性の活動には限界があったため、シナゴグの外／公的領域に出て、Judaism を実践していく場として、女性団体を設立したと解釈できるだろう。ネリー・ラス(Nelly Las)は、NCJW やハダッサのようなユダヤ人女性団体をシスターフッド(sisterhood)の活動の一環であると位置づけている⁵⁴。シスターフッドとは、1890 年代から 1900 年代にかけて、米国の各改革派のシナゴグにおいて結成された中流階級の女性たちによる組織であり、社会奉仕活動に従事していた。この動きは、1913 年に「テンプル・シスターフッド全国連盟」(National Federation of Temple Sisterhoods, NFTS)として、全国的に組織化された⁵⁵。つまり、ラスの解釈によると、そもそも、シスターフッドとは改革派のシナゴグに集っていた女性たちが信仰の実践を公的に行う目的のために結成されたものであった。それに対し、NCJW やハダッサは、新たなユダヤ教のシスターフッドとして、シナゴグを超えて活動するに至ったといえることができる。

次章では、このようなユダヤ人女性団体が、シナゴグを超えて活動するに至った背景を、米国のユダヤ教改革運動の中に探っていく。結論を先取りするならば、革新主義期の米国におけるユダヤ教界ではまだ女性の活躍が極めて制限されていたことが、ユダヤ系女性団体設立の要因の一つとして指摘することができる。

4. 米国のユダヤ教改革運動におけるユダヤ人女性団体の位置づけ

ヨーロッパ大陸から米国にもたらされたユダヤ教の改革運動は⁵⁶、1885 年に出された『ピッツバーグ綱領』(The Pittsburgh Platform)によって、はじめて米国において正統派とは袂を分かち、改革派の形成を表明した。もっぱら、改革派はその草創期の段階では、神学的にも正統派と重なる部分も多く、典礼の近代化やアメリカ社会への適合を試みる過程で、徐々に改革派としての輪郭を形作ってゆくこととなる。ここに女性という視点をいれてみよう。NCJW が設立された時点のユダヤ教の改革運動では、理念的には女性の地位を評価しつつも、実践的にはまだ女性がラビ職に就くなどという抜本的な改革は行われていなかった。米国における初期の改革派の形成に寄与した一人である、イサク・メイヤー・ワイズ(Isaac Mayer Wise)はシナゴグでの「男女平等」を呼びかけていた。それにもかかわらず、依然として、シナゴグでの礼拝は男性中心的なものであった⁵⁷。

1889年にメアリー・M・コーヘン(Mary M. Cohen)は「女性がラビになることは可能か」という発題をフィラデルフィアの *Jewish Exponent* に載せている⁵⁸。M・M・コーヘンの発題以降、女性のラビの可能性に関して協議がなされてきたが⁵⁹、改革派か否かを問わず、実際に米国において女性が正式にラビとして認められることになるのは、1972年まで待たなければならない⁶⁰。1921年には、ヘブル・ユニオン・カレッジの学生且つ同カレッジの教授の娘でもあったマーサ・ヌーマーク(Martha Neumark)が正式なラビの叙任を目指していたが叶うことはなかった⁶¹。比較的、伝統に対して寛容な姿勢をとっていた改革派や、正統派ほどは厳格ではない保守派のなかでも、「女性の士師は、よし！女性のラビは、否！」(Women judges, yes! Women rabbis, no!)という見解が多数を占めていた⁶²。ようやく1972年に公式に女性のラビが誕生したことを皮切りに、女性にラビの叙任を授ける行為が拡大していった⁶³。このような歴史的状況を鑑みると、革新主義期において、正式にラビ職を得ることが制限されていた女性たちの中で、シスターフッドとしてのシナゴグでの取り組みのほか、その外の世界に可能性を模索していく者が登場してきたことは不思議ではない。彼女たちが、Judaism の実践の場として見出したのが、本稿で取り上げた NCJW やハダッサといったユダヤ人女性による公的な活動団体であったのである。

5. おわりに

本稿では、まず第一章において、アメリカにおける革新主義期の特徴を振り返り、第二章において、ユダヤ人女性団体設立の背景を、時代状況とアメリカ化をキーワードに考察し、NCJW やハダッサがこだわった「ユダヤ人女性」団体としての意義について論じた。続く第三章で、それぞれの団体の Judaism 理解を概観し、第四章で米国におけるユダヤ教の改革運動の当時の状況がユダヤ人女性団体の設立につながる点を指摘した。

以上、見てきたように、革新主義時代のユダヤ人女性団体が解釈したユダヤ教理解の特徴が明らかとなった。彼女たちが一般の女性団体に参加することだけでは不十分であるとみなし、ユダヤ性を強調した「ユダヤ人女性団体」を設立した理由の背景として、ユダヤ教内部で女性が活躍できる場が改革派においてできえ、革新主義の時代にはまだ限られていたことが明示された。NCJW やハダッサが設立された時点では、まだ女性にはシナゴグでの大々的な活躍が制限されていた時代であったのである。そのため、同時代の非ユダヤ系のミドルクラス以上の女性たちが相次いで女性団体を設立していったのと足並みを合わせて、ミドルクラス以上のユダヤ人女性たちも「女性団体」の枠組みのなかで、公共圏における自

らの社会的役割を見出すことになった。彼女たちが目指したものは、単に公的領域において活躍するというにとどまらなかった。ユダヤ人女性団体設立の背景には、彼女たちが解釈したユダヤ的遺産、伝統、すなわち、Judaism を次世代へ伝えていくという役割が存在したのである。また、その役割そのものは、伝統的なユダヤ教が育んできた教えでもあった。シナゴグではなく、公的な場所で Judaism を実践するために、ユダヤ人女性による、女性団体を設立したと解釈できるだろう。

革新主義期のユダヤ人女性団体を設立した人々は、その行為自体は革新的な取り組みをしつつも、理念的には、伝統を重んじていたことが理解できる。NCJWの創設者であるソロモンがクリスチャン・フェミニストに向けて、Judaism の肯定的な側面を提示しようとしたように、理念的にはまだ伝統的なユダヤ教理解のなかに女性の立場を見出す一方で、公的な機関として女性団体を設立するといった革新性を持っていた。その理念と実践のあいだには、矛盾ともみなされる曖昧性・複雑性が存在していた。この点にこそ、同時代の他の女性団体とは異なる、初期の米国におけるユダヤ人女性団体としての特徴が浮き彫りになるのである。

推薦者：アダ・タガー・コヘン
同志社大学神学部神学研究科教授

註

* 訳文中および引用箇所執筆による補足は亀甲括弧〔 〕で示した。

* 本稿は、JSPS 科研費 JP17H07235 および JP18K12210 の助成を受けて行った研究成果の一部である。

- ¹ 栗原涼子『アメリカのフェミニズム運動史—女性参政権から平等憲法修正条項へ』（彩流社、2018年）、29頁。
- ² 本稿では、特に断りがない限り、ユダヤ的伝統・慣習を含めた「ユダヤ教」という意味合いで、Judaism という表記を用いている。その理由は、以下に見ていくユダヤ人女性団体の指導者たちが、必ずしも狭義の「宗教」という意味合いだけで、Judaism を語っていないためである。また、文脈上、宗教的意味合いが強調される場合には、「ユダヤ教」と表記した。
- ³ 本稿のテーマと特に関係がある先行研究として以下のものが挙げられる。松本悠子「移民の母と娘—『アメリカ化』をめぐる—」『アメリカ研究』特集アメリカン・ヒロイン、第23号、（アメリカ学会、1989年）、62-81頁。本稿が着目する全米ユダヤ人女性会議（The National Council of Jewish Women, NCJW）について日本語で研究されたものに、森田麻美の以下の研究がある。森田麻美「ユダヤ人女性組織の結成とその意義—世紀転

換期における NCJW の活動― (Abstract, 2006 年度第 7 回 GrASP! 年次大会、於：一橋大学東キャンパス)。同情報は以下のウェブサイトより閲覧可能。

<http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Cafe/6195/2006list.html> (最終閲覧日：2018/08/08)。

筆者は、CiNii および国立国会図書館サーチ、Google で森田氏の NCJW に関する研究論文を検索したが、現時点〔2018 年 8 月現在〕では当該研究に関する論文を確認することができなかった。そのため詳しい研究内容を確認することができていない。

- 4 ドイツ系と東欧系のユダヤ人女性を比較した場合、そこには、経済的、社会的地位の格差が存在したが、イタリア系などの他の出身地の女性と比較した場合、ユダヤ系の女性の社会的地位の上昇は比較的早かったことが確認されている。Thomas Kessner, “New Immigrant Women at Work: Italians and Jews in New York City, 1880-1905,” in *Journal of Ethnic Studies*, V (1978), p. 27; 松本「移民の母と娘―『アメリカ化』をめぐる」、64 頁。
- 5 以下の拙論の一部では、ユダヤ人女性団体の一つである、ハダッサの内部が抱えていたエスニシティの問題に焦点を当てている。大岩根安里「1940 年代前半における Hadassah のシオニズム観：その矛盾、限界、ジレンマ ―The Committee for the Study of Arab-Jewish Relations を事例に―」、『ユダヤ・イスラエル研究』、第 28 号（日本ユダヤ学会、2014 年）、47-59 頁。
- 6 本稿で扱う、ハダッサもその設立初期はドイツ系の指導層に偏っていたが、1930 年代から 50 年代にかけては、東欧系にルーツを持つ指導者が活躍していた。ただし、革新主義時代はまだ東欧系が活躍できる状況になかったことに違いはない。東欧系の活躍については以下を参照。Mira Katzburg-Yungman, *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel* (The Littman Library of Jewish Civilization, 2012), pp. 55-63.
- 7 古矢旬が指摘するように、「アメリカ化」といっても、この時期の「アメリカ化」を目的として活動した集団や個人は多種多様であり、一様に「アメリカ化」を定義できるものではない。古矢旬『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』（東京大学出版会、2002 年）、29 頁。本稿では、国家が促進する「アメリカ化」ではなく、ユダヤ人主体の「アメリカ化」という意味に限定して使用している。つまりユダヤ性を保持しながらアメリカ社会へと順応していくという意味合いで、「アメリカ化」という用語を用いている。
- 8 松本「移民の母と娘 ―『アメリカ化』をめぐる」、68 頁。
- 9 東欧系ユダヤ人の米国への流入に関しては以下を参照。野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク：移民の生活と労働の世界』（山川出版社、1995 年）。
- 10 松本「移民の母と娘 ―『アメリカ化』をめぐる」、70 頁。
- 11 1893 年という年はある意味、ユダヤ人女性にとって象徴的な年であったと言える。NCJW が設立された同じ年に社会福祉事業家として有名なリリアン・ウォルド(Lillian Wald)は、ニューヨーク市で訪問看護サービスを展開したヘンリー・ストリート・ハウスを開設している。
- 12 Jacob Rader Marcus, *The American Jewish Woman, 1654-1980* (KTAV Publishing House,

- 1981), p. 2.
- ¹³ Marcus, *The American Jewish Woman*, p. 90.
- ¹⁴ ソロモンは、ヘンリエッタ・ソルドが取り組んだシオニズム活動に共感し、ソルドの見解に賛同していた。Hannah Greenbaum Solomon, *Fabric of My Life: The Autobiography of Hannah G. Solomon* (Bloch Publishing Company, 1946), pp. 114f.
- ¹⁵ 先行研究でも、NCJW が非シオニスト団体であるという認識は一致している。例えば以下の文献を参照。Katzburg-Yungman, *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel*, p. 277; Erica B. Simmons, *Hadassah and the Zionist Project* (Rowman & Littlefield Publishers, 2006), p. 107.
- ¹⁶ Nelly Las, “The Impact of Zionism on the International Council of Jewish Women, 1914-1957,” in *American Jewish Women and the Zionist Enterprise* (Brandeis University Press, 2005), p. 149.
- ¹⁷ ハダッサに関する研究は主に以下のものを参照した。Katzburg-Yungman, *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel*; Simmons, *Hadassah and the Zionist Project*; 石黒(大岩根)安里「H・ソルドのシオニズム観と『ハダッサ』における展開—アメリカ・ユダヤ人女性シオニストとしての『ユダヤ的伝統』の再解釈—」(同志社大学博士論文) 2016年3月。
- ¹⁸ 本稿では主題が異なるため論じることができないが、以下の点は重要である。第一次世界大戦前夜、一部の女性参政権運動の指導層が、女性に「母性」と家庭の重要性を唱え、アメリカの理念を保持することを訴えた。つまり、母性を強調することで、積極的に女性を「アメリカ化」へと促した過程がある(松本悠子『創られるアメリカ国民と「他者」:「アメリカ化」時代のシティズンシップ』(東京大学出版会、2007年、87-88頁)。この女性の「アメリカ化」への取り込みと、ユダヤ人女性シオニスト団体が同胞のユダヤ人女性に向けて提唱した、ユダヤ性の保持とアメリカ化の主張との比較考察は興味深い。
- ¹⁹ Simmons, *Hadassah and the Zionist Project*, p. 2.
- ²⁰ WIZOの公式ウェブサイト <http://www.wizo.org/> (最終閲覧日: 2018/08/28)。
- ²¹ 女性が政治的領域ではなく、社会福祉の分野で秀でていたというジェンダー・バイアスに基づく見解は議論を要する。このテーマに関しては以下の論文で一部指摘されている。Mary McCune, “Social Workers in the Muskeljudentum: ‘Hadassah Ladies,’ ‘Manly Men’ and the Significance of Gender in the American Zionist Movement, 1912-1928,” in *American Jewish History*, vol. 86, 2 (American Jewish Historical Society Quarterly Publication, 1998), pp. 135-165.
- ²² [引用者による注] *Jewish Home Beautiful* とは、National Women’s League から刊行された本で、当時のユダヤ人女性にユダヤ・アイデンティティ存続のために、女性が家庭で果たす役割の重要性を説いた指南書のようなものである。とりわけ、1930年代から1940年代にかけて、*Jewish Home Beautiful movement* なる運動が起こった。*Jewish Home Beautiful movement* に関しては以下を参照。Jonathan B. Krasner, *The Bendersly Boys: American Jewish Education* (Brandeis University Press, 2011).
- ²³ [引用者による注] NCJW、ハダッサにならぶユダヤ人女性団体で、保守派のシナゴー

グで設立された。

- ²⁴ Pamela S. Nadell, “Women and American Judaism,” in *Women and Judaism: New Insights and Scholarship*, Frederick E. Greenspahn (ed.) (New York University Press, 2009), p. 157.
- ²⁵ Mary M. Cohen, “The Influence of the Jewish Religion in the Home,” in *Papers of the Jewish Women’s Congress, Held at Chicago, September, 4, 5, 6 and 7, 1893*, pp. 115-121.
- ²⁶ アダ・タガー・コヘン「ユダヤ教における宗教教育」『キリスト教教育事典』、今橋朗、奥田和弘（監修）（日本キリスト教団出版局、2010年）、391頁。
- ²⁷ ソロモンの姉妹の一人である、ヘンリエッテ・G・フランク(Henriette G. Frank)はユダヤ教における安息日の重要性について次のように主張している。「安息日は人道主義のためにイスラエルの民に送られた最良の贈り物のうちの一つである」。「安息日という概念はユダヤ教(Judaism)の要である」。Solomon, *Fabric of My Life*, pp. 105f.
- ²⁸ 初期のユダヤ人女性団体は、家庭での儀礼の役割を女性が担っていることを強調しているものの、皮肉にも、古典的改革派ユダヤ教と呼ばれる初期の改革派では、女性が果たす儀礼の実践に関しては、低く評価されていた。Jonathan D. Sarna, “‘To Quicken the Religious Consciousness of Israel’: The NFTS National Committee on Religion, 1913-1933,” in *Sisterhood: A Centennial History of Women of Reform Judaism*, Carole B. Balin, Dana Herman, Jonathan D. Sarna and Gary P. Zola (eds.) (Hebrew Union College Press, 2013), p. 51.
- ²⁹ Hasia R. Diner, “Jewish Women and Ritual,” in *Encyclopedia of Women and Religion in North America*, Rosenmary Skinner Keller and Rosenmary Radford Ruether (eds.) (Indiana University Press, 2006), p. 569.
- ³⁰ Diner, “Jewish Women and Ritual,” p. 568.
- ³¹ Diner, “Jewish Women and Ritual,” p. 568.
- ³² コヘン「ユダヤ教における宗教教育」、394-395頁。
- ³³ Solomon, *Fabric of My Life*, p. 41.
- ³⁴ Solomon, *Fabric of My Life*, pp. 43f.
- ³⁵ Faith Rogow, *Gone to Another Meeting: The National Council of Jewish Women, 1898-1993* (The University of Alabama Press, 1993), p. 12.
- ³⁶ Sara R. Horowitz, “The Paradox of Jewish Studies in the New Academy,” in *Insider/ Outsider: American Jews and Multiculturalism*, David Biale, Michael Galchinsky and Susan Heschel (eds.) (University of California Press, 1998), p. 121.
- ³⁷ Rogow, *Gone to Another Meeting*, p. 13.
- ³⁸ Rogow, *Gone to Another Meeting*, p. 18.
- ³⁹ Solomon, *Fabric of My Life*, p. 31.
- ⁴⁰ Solomon, *Fabric of My Life*, p. 80.
- ⁴¹ Solomon, *Fabric of My Life*, p. 82.
- ⁴² 以下の文献に大会プログラムの詳細が掲載されている。*Papers on the Jewish Women’s Congress, Held at Chicago, September 4, 5, 6 and 7, 1893* (The Jewish Publication Society of America, 1894), p. 7. コロンビア万国博覧会に関する報告書から、彼女たちの演説内容を確認することができる。ただし、報告書には二つの版が存在する。そのためか、ソルドの演説原稿は、二つの版で収録されている文章の長さが異なっている。Rev. John

-
- Henry Barrows (ed.) *The World's Parliament of Religions: An Illustrated and Popular Story of the World's First Parliament of Religions, held in Chicago in connection with the Columbian Exposition of 1893*, vol. II (The Parliament Publishing Company, 1983); J. W. Hanson (ed.) *The World's Congress of Religion: The Addresses and Papers delivered before the Parliament, and as Abstract of the Congress, held in Chicago, August 1893 to October 1893* (Edition Synapse, 2006).
- ⁴³ Marcus, *The American Jewish Woman*, p. 89.
- ⁴⁴ Eric L. Goldstein, "Between Race and Religion: Jewish Women and Self-Definition in Late Nineteenth Century America," in *Women and American Judaism: Historical Perspectives*, Pamela S. Nadel and Jonathan D. Sarna (eds.) (Brandeis University Press, 2001), p. 190.
- ⁴⁵ Pauline Hanauer Rosenberg, "Influence of the Discover of America on the Jews," in *Papers of the Jewish Women's Congress, Held at Chicago, September, 4, 5, 6 and 7, 1893*, p. 72.
- ⁴⁶ ソロモンの自伝では、Henriette と表記されているため、日本語訳もそれに従った。ただし、コロンビア万国博覧会における報告書では、Henrietta と記載されている。
- ⁴⁷ Henrietta G. Frank's response to Helen Kahn Weil's paper, in *Papers of the Jewish Women's Congress, Held at Chicago, September, 4, 5, 6 and 7, 1893*, pp. 49f.
- ⁴⁸ Frank's response to Helen Kahn Weil's paper, p. 51.
- ⁴⁹ Hadassah, "The Healing of the Daughter of My People," in *The Maccabean*, vol. 23 (May, 1913), pp. 3-8.
- ⁵⁰ Marvin Lowenthal, *Henrietta Szold: Life and Letters* (Greenwood Press, 1942), p. 85; Michael Brown, "Henrietta Szold's Progressive American Vision of the Yishuv," in *Envisioning Israel: The Changing Ideals and Images of North American Jews*, Allon Gal (ed.) (The Magness Press, Wayne State University Press, 1996), p. 66.
- ⁵¹ Baila Round Shargel, *Lost Love: The Untold Story of Henrietta Szold, Unpublished Diary and Letters* (The Jewish Publication Society, 1997), pp. 332f.
- ⁵² Henrietta Szold, "The Education of the Jewish Girl," in *The Maccabean*, July, 1903, pp. 5-9.
- ⁵³ Simmons, *Hadassah and the Zionist Project*, p. 35.
- ⁵⁴ Nelly Las, "The Impact of Zionism on the International Council of Jewish Women, 1914-1957," in *American Jewish Women and The Zionist Enterprise*, Shulamit Reinharz and Mark A. Raider (eds.) (Brandeis University Press, 2005), pp. 146f.
- ⁵⁵ Pamela S. Nadell, "National Federation of Temple Sisterhoods," in Jewish Women's Archive, Encyclopedia (<https://jwa.org/encyclopedia/article/national-federation-of-temple-sisterhoods>) (最終閲覧日: 2018/08/28) ; Gary Phillip Zola, "Sisterhood and the American Synagogue: An Introduction," in *Sisterhood: A Centennial History of Women of Reform Judaism* (Hebrew Union College Press, 2013), p. 5; Paula E. Hyman, "Gender and the Immigrant Jewish Experience in the United States," in *Jewish Women in Historical Perspective*, Judith R. Baskin (ed.) (Wayne State University Press, 1991), pp. 222-239.
- ⁵⁶ Marcus, *The American Jewish Woman*, pp. 56-58.
- ⁵⁷ Rogow, *Gone to Another Meeting*, p. 72.
- ⁵⁸ Mary M. Cohen, "A Problem for Purim," in *Jewish Exponent*, March 15, 1889, p. 1; Karla Goldman, *Beyond the Synagogue Gallery* (Harvard University Press, 2001 [2000]), p. 198; Nadell, "Women and American Judaism," in *Women and Judaism*, pp. 155-181. 女性のラビ

職に纏わる問題に関しては、以下の研究を参照。Pamela S. Nadell, *Women Who Would Be Rabbis: A History of Women's Ordination, 1889-1985* (Beacon Press, 1998); Pamela S. Nadell and Jonathan D. Sarna (eds.) *Women and American Judaism: Historical Perspectives* (Brandeis University Press, 2001).

⁵⁹ Pamela S. Nadell, "Jewish Women's Ordination," in *Encyclopedia of Women and Religion in North America*, pp. 960-965.

⁶⁰ Nadell, "Jewish Women's Ordination," p. 960, 964; Norma Baumel Joseph, "Jewish law and Gender," in *Encyclopedia of Women and Religion in North America*, p. 582.

⁶¹ Janet R. Marder, "Are Women Changing the Rabbinate?: A Reform Perspective," in *Religious Institutions and Women's Leadership: New Roles Inside the Mainstream*, Cathrine Wessinger (ed.) (University of South Carolina Press, 1996), pp. 271f; Marcus, *The American Jewish Woman*, pp. 77f.

⁶² Marcus, *The American Jewish Woman*, p. 78.

⁶³ 女性がラビ職を奉ずることについて、正統派はいまだに論争の渦中にあるが、1972年、米国初の女性ラビが誕生して以降、1974年には再建派から女性ラビが誕生し、1985年には、保守派の運動を展開したユダヤ教神学校(The Jewish Theological Seminary, JTS)でも女性のラビが誕生している。詳細は以下を参照。Karla Goldman, "Reform Judaism," in *Encyclopedia of Women and Religion in North America*, p. 541.